

輓

歌

TOKYO BOOKS

輓 歌 ￥ 390

0293—720912—5170

著者無検印承認

昭和四十七年一月二十日印刷
昭和四十七年一月二十五日発行

著作者 高木彬光

発行者 角谷奈良雄

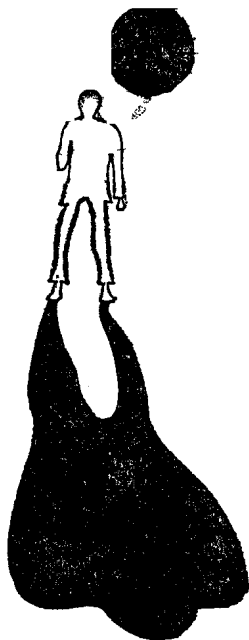
発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三十二
出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替・東京二七五七
電話・(03)335550

輓歌

高木彬光



目次

前編・わが一高時代の犯罪

五

後編・輓歌

一三

装幀 長尾みのる

わが一高時代の犯罪

その時代

追憶は美しいものである。まこと、忘却の霧は、はるかなる時の彼方にわだかまる、苦悩と悔恨とをおおいかくし、美しきもの、なつかしきもの、心うたれる思い出だけを、鮮かに浮かび上らせるものであろうか。

思えば、ものみなすべて、滔々として移りかわる今の世に、帰り来ぬむかしの夢を追うことは、むなししい痴人の業にすぎない。

と知りつつも、私はいま十年の昔にすぎ去った一高三年の思い出を、甘い、ほろ苦い感傷と胸をしめつけられるような、やるせない気持で思い浮かべずにはおられない。

この物語は、その失われた青春に捧ぐる秋の挽歌である。この世から姿を消した、一高に捧ぐる一つの悲歌である。

この筆をとる二、三日前、私はふたたび、思い出の駒場の丘をおとずれた。

渋谷から帝都電鉄で五分、二つの短いトンネルを横ぎって、三両連結の電車は、十年前と少しも変

らぬ、一高前の駅につく。

右に石段を降りて行けば、むかしはそこに「のんき」というすし屋、「一幸」という喫茶店、私たちの事あるごとに屯した二軒の店があったのだが、爆撃に焼きつくされたその跡に、昔をしのぶ由もない。

私は、そのまま道を左にとり、藪間の道を、二、三間進んで学校前の芝生に出た。

ウルトラマリーンの色にすみ切った、朝空に、赤灰色の時計塔が、パッと眼前に浮かび上った。本館の左に講堂、右に図書館、そして木の間に点々として見える四つの寮。

もはや、第一高等学校の門札はとりはずされ、見なれぬ、東京大学教養学部（当時）の門札が、そのかわりにかかげられている。

最後の校長、天野貞祐氏が、職を賭して、学制改革に伴う一高の廃校に反対したということも、新聞紙上では、わずかのスペースを割いて報道したにとどまった。まして、夏目漱石の親友、菅虎雄教授が、渾身の情熱を傾けて書きあげた、あの見事な隷書の門札が、春雨のしと降る日、感慨の涙のうちに、とり外されたということと、とり上げた新聞は、ほとんどなかった。

——ゆく川の流れはたえずして、しかももとの水にはあらず。流れに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びていささかもとどまることなし。

私も、神津恭介も、そのほかこの物語に登場するすべての人々は、一高六十年の歴史の流れに、浮かんで消えた数かぎりない泡沫の一つ一つである。

うたかたの青春、うたかたの恋、うたかたの犯罪、うたかたの死。

数かぎりない、泡沫の思い出を秘めて、流れはいまやたえたのだ。

私は、軽く門番に会釈をして、以前には教授と学生のほかに、無断で出入を許されなかった正門をくぐった。

思えば、私が二条の白線に、金色の柏葉のかがやく帽子を誇らかに、この門を初めてくぐったのは、いまを去る十数年前、昭和十二年のことである。

そして、本郷から駒場へ、一高が移って来たのは、それを溯る二年前、昭和十年九月であった。

さらば！　さらば！　先人の夢いざさらば！　向ヶ丘よ、いざさらば！

開校以来五十年、幾多の先人の青春をばくくみ育てた本郷向ヶ丘の地に、自らも去り難き魂の故郷、八つの寮に、別離を告げた。一高九百の学生は、銃を肩に、歩武堂々、自由を求め、新しき歴史を求めて、この駒場の丘へ発足した。

眼を閉じれば、私の耳には、彼等のサクサクと砂利を踏み鳴らす靴音が、いまなお聞えてくる気がする。

開拓者の希望を胸におどらせて、彼等がこの新天地にたどりついたとき、時の校長、森巻吉は、ふたたびこの丘に、向ヶ丘の名をあたえた。

だが、それは、はかない虚名にすぎなかった。誰一人、この丘を向ヶ丘とよぶ者はなかった。

新墾のこの丘の上　移り来し二歳の春

緑なす真理求めつつ　万巻書索るも空し

永久の昏迷抱きて　向陵を去る日の近きかな

当時の寮歌を耳にする者は誰しも、その曲にひそむ、かぎりなき哀愁と、すぎ去った本郷の生活に寄せる、切々たる思慕を感じずにはおられない。

狭苦しい敷地の中に、無理を重ねて増築した、木造二階建の寮のかわりに、何万坪という敷地の中に、鉄筋三階建の豪荘な三つの寮が肩を並べて、彼等を迎えたはずなのに。

万巻の書は蔵に満ち、人材を撰った教授陣には、何の不満もないはずなのに。

清潔な水洗便所や、雨天の日には傘もささずに、学校と図書館へ往復できる地下道にいたるまで、当時の高等学校としては、ほかに類もないほどの施設に恵まれていたはずなのに。

なぜだろう。彼等はこの新天地に、何の不足を感じたのだろう。

内村鑑三以来の、聖基督教徒といわれた、三谷隆正教授は、これを歎じていったという。

——大殿堂を営めど、そこに住むべき貴人なし。輪環の美は誇れども、そこに住むべき自由なし。それは暗黒への時代であった。いつの間にか、日本全土を蔽いつくした軍国主義の濁流は、垣をやり、門を越え、多情多感の青年の胸に、ぬぐい得ぬ暗影を刻みこんでいた。

私は、その象徴を、私の一高時代の校長、橋田邦彦博士の姿に見る。

正法眼蔵の権威として知られる、東大医学部教授の橋田博士が、白髪のかげしい顔で、この玄関に黒のガウンを着て立ったのも、つい昨日のことと思われるのに……。

去る者をして去らしめよ。逝く者をして逝かしめよ。

だが、博士が敗戦の責任を感じて毒をあおいだとき、その最後の眼に去来したものは、はたして何の影だったろうか。

正法眼蔵の経文か。帝国議事堂の大臣席か。文部大臣官邸か。東大医学部研究室か。それともまた、いま私の眼の前に、そびえる一高の時計台か。

それは私の知るところではない。

思えば、博士も永遠の歴史の流れに浮かぶ、無数の泡沫の一つであった。

そのような歴史的な意義こそ持っていないといえ、私はそれに似た悲劇を、この時計台の中に見る。三階の建築の本館正面玄関の上に、さらに三階の高さをもってそびえる時計台の中から、一人の生徒が忽然と、跡形もなく、煙のように姿を消したという事件を、いまなお記憶の中にとどめている人は、当時の一高生の中でも、はたして何人いるだろう。

そして、その事件の真相を知っているものは、私と神津恭介のほかにはないのだ……

私は、踵を返して、図書館と、むかし中国留学生の校舎にあてられていた特高館のあいだの道を、寄宿寮の方に降って行った。

南寮、中寮、北寮、明寮。

この南寮の二階、十六番室に、私は嵐の時代の一高生活の第一歩を踏み出したのだった。

その人々

東西に連る薄暗い廊下をはさんで、両側に十ずつ部屋が並んでいる。

南側が自習室、北側が寝室。机と椅子と木製の寝台のほかには何の装飾もない。

本は、机の上の本箱に、荷物は寢室の上の棚に、靴だけは階下の下足箱に、單純素朴な生活だった。

南寮十六番室は、いわゆる一般部屋であった。運動部にも、文化部にも、その人員に應じて部屋が割りあてられ、二年三年となれば、無所屬の生徒は、クラス別に部屋を分けられて暮すのだが、一年生のあいだは、文科理科の差別も、クラスの別もなく、定員ずつ詰めこまれて行く——これが一般部屋であった。

定員は約十六人。この中に、神津恭介がまぎれこんでいたのだった。もともと、私は最初から、彼をとりわけ意識していたわけではない。

色の白い、長身のやせぎすな、頬の真赤な美少年。女のように、華奢な繊細な体の持主だった。一高に、同性愛の野蛮な風習がなかったことを、私は彼のために祝福したい。

「僕、神津恭介といいます。東京の府立四中の出身です。どうぞよろしく」
はにかみながら、初めて部屋に入ってきた彼は、皆の前に頭を下げて、マントにブラシをかけ出した。

私たちは、思わず顔を見あわせた。敝衣破帽を誇りとする、一高生が、マントにブラシをかけようとは、それこそ輕蔑に値する！

だが不幸にして、長髪美髪を禁ずる規則こそあるが、マントと洋服にブラシをかけてはならぬという規則はない。

しかも、この習慣は、それから三年、一日も休みなしにつづいた。彼は一度も朴鹵の下駄をはいた

こともなく、手拭を腰にぶらさげたこともなかった。

まるで中学生の出来損いだと思っっている中に、彼の人なつっこい片えくぼを浮かべる、独特の微笑が私の心をひいた。クラスも同じだったので、間もなく私たちは仲よくなった。

だが、驚いたことには、彼ぐらい勉強しない男はないのである。

私も、当時の便法として、一高と受験日の重ならない北大予科の試験とを同時に受験して、難しい一高に通って、易しい北大の方を滑り、紛れあたりというものは恐しいものだ、と自ら歎じたくらいだから、ちつとやそつとのサボリストではないつもりだが、神津恭介に至っては、十一時間の独逸語も、四時間の数学も、申しわけのように教室に顔を出すだけ、部屋に帰ってくると、ひとり机に向つては詰将棋ばかり並べているのである。

一学期の試験が近づいて、課目と日割が発表になつても、彼は悠々、ホールでコーヒーをのみながら、碁を打っていた。鉱物の試験の前日になつて、私が彼の本を開いたら、パリパリと紙の離れる音がして、半分ばかり乱丁だった。

おこがましくも、私はこの天才に、こういつてなくさめたものである。

「一高じゃ、成績は問題にならんのだからね。どんなに成績がよくつても、別に尊敬もされないし、どんなに成績が悪くつても、軽蔑もされないんだからね。どうも衆目の見るところ、逆トップは君か僕か——まあ、お互いに仲よく肩を並べて行こうじゃないか」

彼は笑つて、何とも答えなかった。

だが二学期の初めになつて、本館の玄関にはり出された席次の表を見、私は開いた口がふさがらな

かった。

六十人中、私の五十九番はいいとして、彼は一番、それが三年間一度も狂わなかったのである。

何しろ、玄関にはり出されるのであるから、その見苦しいことは、一通りや二通りのものではない。私の母が、寮へ訪ねて来たときに、私はこの数字の説明に困った。幸い席次のほかには、何の記載もないのをいいことに、苦心惨憺、ひねり出した解答が、何と下駄箱の番号とは。……

（地下に眠る母君。願わくば、この不肖の子の、あわれなるトリックを許したまえ）

一視同仁の気持は、ひそかな敬服とかわった。私は彼の行動の一つ一つを、別の眼で見るようになった。

消灯時間の十二時を過ぎても、寮務室の二階には、電灯の消えない読書室がある。彼は毎朝三時に起きて、その机の上で、私の数学の知識では見当もつかない、高等数学の研究をつづけていた。

微かに分る微分学や、分った積りの積分学の類ではない。

後日、独逸の学術雑誌に発表されて、第一高等学校教授、理学博士、神津恭介殿という手紙を受けとる結果になったのは、この時間の研究の産物であった。

彼は初め「嬢や」といわれていたが、そのあとで愛称は「ドクトル」とかわった。

それから、「フラテン」という男がおった。文科の生徒で、名前は飯田良太郎、頭でっかちのオタマジャクシのような青年で、寮歌をどなつても、一オクターブは完全に狂うという音痴だった。難しい哲学書ばかり読んでいては、寝言にもショーペンハウエルの名前がでてくると笑われていた。

一年生の当時には、それほど鋭鋒をあらわすことはなかったが、「青髯」という男もいる。医者

息子の、青木一彦という男。七人の妻をめとったという青髯にあやかっ、彼は同時に七人の恋人を持っていた。

曜日によって、相手とする女はきまっていたのである。

女学生あり、女給あり、人妻あり、看護婦あり、というわけで、七人を越えることはなく、何かの拍子で一人欠けると、すぐにその曜日を補充した。

ただ一度、彼に不名誉な事件がある。

木曜日の女が、愛想をつかして、彼に別離を告げたとき、彼女は手切金として、彼に五十円わたしという。

一日食費五十五銭、コーヒー一杯五銭の時代の五十円といえば、中々の大金である。それを彼は、ハイそうですか、とだまって受けとったというのだった。

私たちも、これにはさすがに愛想をつかした。一高生の風上にもおけぬ、と憤慨したのだが、このことについては、この物語の中でふたび触れる機会もあるう。

そして最後に、一高三奇人の一人といわれた「西式」も、山岳部に入つて、この部屋を出て行くまでは、私たちの部屋で奇妙な生活をいとなんでいたのである。

西式とは、西式健康法の意味である。

童顔で、中学生のようなオットリとした風貌のくせに、年は私たちより七つも上だった。それだけならば、別に驚くこともないが、何と彼は、三高文科を卒業し、京大文学部の哲学科に二年まで在学して、とたんに西式健康法に共鳴し、この健康法を医学的に究明しようと思ひ立つて、京大を退学、

あらためて一高の理乙に入り直したのである。

名前は、妻木幸一郎、その七つ下の弟の賢二郎も、部屋こそ違え、同時に一高の文科に入学していた。

彼のもっとも困ったのは、恒例の一高三高戦の応援だったというが、私たちにいわせれば、彼の日常生活はすべて調子が狂っていた。第一に、彼は決して畳の上に寝なかった。木の寝台の上に敷かれた畳をはぎ、板の上に毛布を敷いて寝た。

食物は、常食が三度三度、麩であった。これについては、フラテンが、

「西式は 鯉のまねして 人の子は

細きが上に 細まさり行く」

という名歌をよんだ。

そして最後に、奇想天外の入浴がある。

一高の風呂は、温泉プールぐらいの広さがあり、中央の脱衣場の左が普通の風呂であり、右が水風呂になっている。

西式健康法によれば、入浴は温湯と冷水とに、交互に正確に時間を測って入浴すべきものだということである。だが、施設の完備を誇る向陵にも、浴室に時計のなきをいかんせん。

彼は、きわめて科学的に、この難問を解決した。

入浴の際には、必ず弟がさそいにくる。脱衣場で服をぬぎ、体を洗って湯槽につかる。ここまでは、西式といえども吾人と何のかわりもない。ただ彼等のたずさえて行くものは、石鹼にあらず、剃

刀にもあらず、ただこれ一箇の砂時計！

サラサラと砂が、上の壺から下にこぼれ落ちると、手拭を頭に、満を持していた兄がよぶ。

「おい、賢ちゃん、時間だよ」

「あいよ！」

二人はパッと、湯槽を蹴たててとび上る。そして一秒たりとも惜しむかのごとく、裸の人々をおしのけ、かきわけ、右手には聖火をかかげるオリンピック選手のように、砂時計をふりかざし、左手の手拭に股間の一物をおさえ、脱衣場を横切って、水風呂目がけて突進する！

あきれかえった人々が、思わず顔を見あわせる中に、たちまち西式は帰ってくる。またもや砂時計の駄足はつづく。

これを、入浴のたびに三度ずつくりかえすのであった。これがどうやら、彼の一高を選んだ理由のようだった。

私自身についていえば、伝統的な一高生を想像していただくだけで事たりる。

手拭は、一本のものを三年使うものと心得、汚れば風呂で体を洗いつつ洗濯し、食堂には扉の開くのを待たずかけつけ、学校は六十日ときめられた欠席許容日数を、五十九日まで利用し、学ぶでもなく、遊ぶでもなく、その名もウルトラスーパードという。これはその下に、エックストラ・オージナリ・イーター（超々弩級大食漢）という語を省略したものというが、不幸にして私は、汁粉十五杯の記録しか持たない。

このような、私たちの一高史における地位をいえば、それは過渡期の年度であった。